

横断歩道に切り込みを入れて、アスファルトをめくるとするじゃん、その下はどうなってると思う？がらんとした青空をバックにして、二階堂は無表情に僕を見つめながら問いかけてきた。僕はシャツで顔を仰ぎ、鮮やかな信号機の赤をぼんやりと視界の隅に捉えながら答えた。

「さあ：アスファルトの裏で鬱憤たまった土が太陽を浴びて：大喜びでもするんじゃない。はじけ飛ぶみたいにさ。」

二階堂の長い腕がアスファルトをばりばりとめくる場面を想像して、僕は奇妙な気分になった。押し固められていた茶色い土が我先にと飛び出して、あつという間に道路を染め上げていく。

「アスファルトの下の土が、そんな健康的な思考状態を保ってるかな」

二階堂が真剣に身を乗り出してくるので、僕は半歩遠ざかった。

「知らないよ：そもそもアスファルトをめくるって言わないだろ」
真夏の信号機が青色に変わる瞬間は、気が滅入る。立ち止まっていた足にまとわりつく湿り気と蝉の鳴き声が、煩く一步目を邪魔するからだ。ずっしりと重たい足を動かして、僕は横断歩道を歩き始めた。二階堂は、僕の鬱々とした心もちなんてお構いなしに、爽やかに歩を進めている。どうにも二人の歩調が合わなくて半歩後ろの僕を何度も振り返りながら歩くもんだから、二階堂の上半身はとても忙しそうだ。肩に掛けられた安物のビデオカメラのケースが、何度も僕の腕に無遠慮にぶつかってはねた。映像専門の大学でもない、何でもない映画制作サークルが買うことのできるビデオカメラなんて、たかが知れている。どこかの親が一人娘の運動会のために回しているカメラの方が、きっと高性能に違いない。二階堂は自分のカメラを持っていくくせに、今回は部のカメラを使うと言ってきかなかった。そんなカメラが入ったケースの紐をまるで命綱かのように握りしめて、二階堂はまた僕を振り向きながら話をつづけた。

「アスファルトの下にいるのはさ、地底人だと思う」

「ありきたり」

「そう言うだろうな。でもこれでいくよ。たとえば笹岡、お前のそのスニーカーの下のアスファルト。その裏には笹岡と同じスニーカーを履いて、同じスピードで歩いて、同じように暑さで死にそうな顔をした男がいるんだ。お前たちは同じアスファルトを共有して生きてる。表裏一体の存在だ。だからこちら側からアスファルトをめくったら、裏側の笹岡が顔をだす。顔っていうか、足？あれ、どうなるんだろう：どうやって撮ろうかな、ここらへん。」

「撮り方の前に、そこからどうやって膨らませますの。その話。」

ぺらりとめくられるアスファルトに、そのままひっついて現れる地底人の僕。いかにも学生映画にありそうな脚本で、むず痒い。チー

プだ。

「そうそう、ここから先は考えてない。このままじゃ馬鹿みたいな出オチ映画だよな。設定で力尽きてるやつ、山ほど観てきたよなあ。で、地底人の笹岡は、お前と何が違うんだろう。」

「やっぱり考えてないのかー脚本は撮影場所について見せるって言うってただろ。」

少し怒った顔を作ると、頼りなく眉を下げた表情が返ってきた。

「ごめん。でもさあ、これが俺の学生生活最後の映画だからさ」

ずっと僕の方を向きながら歩いてきた二階堂が、ふと前を向いた。

小さい頭に不釣り合いな大きな耳の裏から、汗が垂れる。

「最後だから、お前と脚本とか練りながら撮ってもいいかなと思っ
てー俺もお前もたくさん撮ってきたし、こんなやり方の時があつてもいいだろ。」

「……映画っぽいな、今の流れ。お前が前向いて今の台詞言う流れ。」
「まじで？撮ればよかつたな」

顔を合わせないまま笑い混じりの声でそう言われて、僕はどうにもへその辺りが痒くなった。二階堂は青春映画の類をあまり観ないくせに、本人にはその素質があると僕は常々思っていた。日常、彼がぼろぼろと言った言葉を切り取って青春映画の脚本に加えたなら、違和感なく溶け込むはずだ。自然体で映画の中に生きているような二階堂が僕は好きだが、今はまとわりつく夏の湿気が嫌で、どうにも見合つた返事が出来なかつた。

二階堂が持つカメラケースは強く握りしめるあまりに、肩からずり落ちていた。僕はそれを心から見られなくて、二階堂と同じように前に伸びる道を向いた。背の低いビルや小さな飲食店が窮屈そうに並ぶ街並みの上にあるのは、夏にありがちな雲の一つも無い青空だ。どこにもありそうな風景だが、僕はここがどこだか分からなかつた。今朝二階堂に告げられた地元とも大学とも程遠い馴染みのない駅で待ち合わせて、恐らくもう一駅分は歩いている。甘つたるくてじんわりした空気をかき分けるように進む二階堂の後について、街路樹が茂る道から細い路地裏までじぐざくと進んでいた。電信柱に貼られた地名を確かめるのも億劫で、真正銘名前も知らない街を、いま僕は歩いている。

カメラケースが、再び僕の腕ではねた。そして二階堂の身体ではねて、また僕に戻る。その感覚をぼんやりと反芻しながら、そういえば学生最後の夏だ、と思った。四年生の夏はずしりと重たくて、どこかに投げ出してしまいたくなる。今日も二階堂が呼んでくれなければ、僕は部屋の外へ踏み出せなかつただろう。僕に何故か暑苦しいリクルースーツを着てくるよう命じたのが二階堂だとしても、閉じた殻から軽やかに連れ出してくれる存在がいるって、多分すご

く良いことだ。暑さに負けて少し邪見にしてしまった、二階堂の後ろ頭を見あげた。この頭は今間違ひなく、地底人の僕のことを考えている。いつだって自分の映画のことを考えてきた二階堂は、小さな映像制作会社に就職を決めた。これでずっと撮り続けられるな、と言った僕に、でも撮りたいものを撮られなくなったら多分辞めると思う、と目だけ細めて笑っていた顔がフラッシュバックした。それを貫き通すのに、大変な意志がいることを二階堂は知っている。二階堂にはそれがあるけれど、今の僕には無いことも、きっと分かっている。

線路沿いを歩いてみると、古びた駅が目に入ってきた。駅前は小さなケーキ屋やスーパーがあるくらいで、だんだんと山手に来ていることは分かった。どこまで歩くのか分からないが、この駅を集合場所にしなかったのは、道中僕と脚本を練るっていう目的のためだろう。僕は駅名を視界に入れないように、半歩前を行く二階堂のねた寝癖だけを見つめていた。街の名前は、この際知らないままで行こう。僕にとつては二階堂の映画の舞台として知る街なのだから、映画が出来るまではいつそ知らない方が良いでしょう。そんな詩的な気分になったのは、地底人のことを考え続けている二階堂につられたからだ。もう暫く言葉を発していない二階堂に焦れた僕は、諦めて口を開くことにした。

「地底人は、表の僕らとは正反對つてのはどう。」

二階堂が、僕の言葉にさらりと振り向いた。口端が上げられるのを見て、やはりこちらから持ち掛けるのを待っていたんだろう、と僕は呆れた顔を作った。対峙する二階堂の笑顔は、赤ん坊のようだ。僕の顔なんか光線みたいに突き破ってしまう。僕は、それを受け止

めきれずにどうにも頬の筋肉が揺れるのを感じた。
「正反對な、俺も考えた。あっちのお前はお喋りで陽気で、海水浴とか山登りが大好きなんだろ？まあ撮りやすいだろうけど、ちょっと浅くないかな：想像ついちゃうよ。」

「そういう正反對じゃなくて――僕が立ち止まるところで地底人の僕は突き進んで、地底人が立ち止まるところで僕は悩まない、みたいなさ。インドアな所も暑さが嫌いなのも同じだけど、ぶつかる壁が違うっていうか：うまく言えないけど。」

地底人に願望を押し付けるなんて馬鹿げているが、映画の中でくらしい僕と同じ顔のやつが機嫌よく生きていても良いだろう。「一階堂は、いいじゃん、と何処かに心を預けたような口ぶりで返事をして、陽炎が揺らめく道の方に顔を向けてしまった。」

二階堂の頭から目を逸らすと、夏がまた押し寄せて来た。アブラゼミまでじりじりじりじり鳴き始める始末で、僕はずっと抱えていた倦怠の心をいよいよ直視せずにはいられなくなった。駅前の店

はいつの間にも後ろへ過ぎ去ったのか、小綺麗な家がぼつぼつと並ぶ住宅地へと変化して、日光が家の屋根の上を滑り直線を描いて僕を突き刺すようだった。個性を押し出したようなピンクの家の壁や、迫ってくる公園の緑、熱を跳ね返すグレーの道路、全てが僕を責めている心地がした。しかし、どんよりと俯き加減の心象とは反対に、道は上り坂になっていった。脚にかかる重みに嫌な予感がしたので、声を絞りだして二階堂にぶつけた。

「：なあ、撮りたい場所は決まってるのか？」

「ああ、高台。この街良い高台があるんだ。この前見つけた。」

ああ、やっぱ。二階堂の映画には必ず高台が登場する。展望台とか、そういう詠えたようなものではなくて、街並みの間から偶然景色が開けて、そこだけ世界が広がるような心地にさせてくれる高台。僕はいつそんな高台が出てくるか楽しみで、二階堂の映画を初めて観るときは背景をいつも気にしていた。でも自分がその背景に立つとなれば話は別で、高台に出るまでに一体どれだけの坂を上るのか、太陽にじんじん照らされながら想像せずにはいられなかった。思わず空を見上げた時、思い出したかのように二階堂の肩にかけられたカメラケースが僕の腕にはねた。その瞬間、僕の感情は不思議と、楽しく二階堂の映画を観ていた時に巻き戻った。上れば上る程、良い高台に出会える。二階堂の撮影に同行する度に学んだことじやないか。カメラケースはつかの間の時間、僕を四年生という現実から飛び出させてくれた。

現実に渦巻く漠然とした悩みとか憂鬱から目を背けて二階堂のカメラケースだけを見つめながら上り坂を進み続けて暫くすると、すっかり無口だった二階堂が静かに立ち止まった。それにつられて音も無く動きを止めたカメラケースから仕方なく目を離すと、目の前には高台ではなく、長い階段があった。苔と草が顔を覗かせる大きな石壁と背の高いトタン塀で両側を挟まれたコンクリートの階段は、途中で一度緩く曲がる以外は真っすぐ伸びた良い姿をした階段だった。

「最初のシーン、ここから撮る。」

「了解。」

「台詞、ずっと考えてた。シーン毎に言うから。」

つまり、カメラ担当の二階堂がシーンを変えらる度に僕の台詞を教えるてくれるので、それをそのまま言えよということだ。僕は一介の映画サークルの部員に過ぎず、台本を覚えるという芸当は出来ないのでこの撮影方法は有難い。演じる側に回ったのは片手で足りる程度で、演技力が成長することはなかった。僕らの映画サークルでは、映画を撮るのに演劇サークルから役者を引っ張ってくる人も何人かはいた。二階堂も過去に一回は主役に演劇をやっている知り合

いを使っていたが、学生生活最後の映画とやらは何故か僕を使うことにしたらしい。僕は二階堂が一年の時に撮った最初の映画でも主役だった。雨の時にだけ現れる花の精という役と僕の棒演技が相まって、いつ見ても心臓が痒くなる良い映画だ。何故僕を選んだのか、今回の映画に誘われたときに聞くと、「台詞も固いし表情も全然変わらないけど、技量がある奴の演技より笹岡の演技の方がなんか目に残るんだよな」とぼやくように言われた。心じゃなくて目に残る？と問うと、うん、と子供みたいに頷かれたのでそれから何も聞けなくなつた。今の僕は、二階堂の映画に出ていた時の僕じゃない。曇つた不安が体中を駆け巡っていて、とても二階堂の目を満足させられる気がしない。

階段は住宅地の真ん中にあるはずなのに人の気配がまるで無く、石壁やトタン塀の向こうにいるはずの人の声も全く聞こえなかった。更に僕にとってはおかしいことに石壁のある背の高い建物のおかげで日の光は遮られ、木洩れ日どころどころ射す程度だった。階段の中央を貫くような形の黒い手すりにもたれて二階堂を見ると、しやがみ込んでリュックを漁っていたかと思えば、がばりと顔を上げてカッターナイフを差し出してきた。

「これでコンクリートを切る。最初は横断歩道にしようと思つたけど、この階段の方が良い。薄暗くて、今の笹岡に合う。」

「：良い階段だよ。緑もあるし：で、どうやって撮る？」

「表面にカッターを構える所までは上から撮って、切つてるところは地面と平行と、下から撮る。」

「了解。」

僕らのサークルにCGの技術は無く、二階堂も学生の間は必要ないと言つて結局手を出すことはなかった。だからコンクリートにカッターナイフで切り込みを入れることは出来ないし、地底人の僕と地底人の僕が同じ画面に入ることも基本的には出来ない。二階堂は、カメラとマイクを既に構えていた。

「よし、始めよう。3、2：：：」

(地底人、名前無し) … 大学4年、基本笹岡と同じ
(地底人、名前無し) …

地底人がよろめきながら歩いてる。太陽に顔をしかめながら階段を上り、真ん中あたりに腰かける。ポケットからカッターを取り出し、刃を伸ばしてコンクリートに押し付ける。汗を垂らしながら切り続けて階段をめくる。まず手から、次

に頭が出て次第に全身。地底人が姿を現す。

底 (スーツのジャケットを羽織る) よう。こっちは日陰か、いいな。それで、なんでめくった？

表 (ジャケット無し) ああ、地底人の僕。会えて嬉しい。聞いてくれ、不安が溢れて死にそうだ。∴地底人が本当にいなら交代してほしいと思った。それで階段をめくったんだ。

底 いたな。当然、君らの足の裏に僕らはくつついて生きてる。誰にだって僕らはある。―地表も面白そうだし交代してやってもいいが、僕と君は基本的に同じはずだ。僕は今のところ平和に生きているが、何があった？

地底人、階段に腰かけ悩みを話すように促す

表 不安だ、何処へ行くにも不安を引きずってる。やりたいことをやりたいけどまるで自信がない。でも目を逸らしてもやりたくないが追いかけてくる。どうしたらいいんだ―不安は嫌で、逃げだしたい。

二階堂が作る台詞が僕の心を反射しているような心地がして、言葉が震えた。右手にカメラ、左手にマイクを構えながら二階堂はアングルを探して僕の周りを彷徨っている。台詞を伝える以外に一言も会話は無かった。ふと辺りを見ると、木洩れ日さえも息を潜めていて昼間だというのに階段は薄暗く、石壁の緑がじんわりと深くなっていた。その色につられるように僕は深く息を吸って、スーツのジャケットに腕を通した。

底 君は僕と同じ、四年生だな。

表 地底人も大学に通うのか。

底 悩むより前に君は勉学を選んだ。それは僕も同じだ。だが僕と同じなら、今何も悩むことはないはずだろう。

地底人は微笑を浮かべている。蝉の鳴き声も全く気にならない様子。地表人、身を乗り出す。

表 悩みばかりだ。たとえば大学を出した後だ。何も決まっていんだ。

底 就職だ。決まってるだろ？∴大学まで来たんだから。

「――僕だ。」

ジャケットを再び脱いで、投げやりに手すりに向かって放り投げた。地底人が話す度にジャケットを羽織らなければならぬので蒸されてたまらない。これだから夏は嫌だ：学生最後の夏なんて特に。確かに苛立ちとともに僕は二階堂に言葉をぶつけた。

「ドキュメンタリーのつもり？」

二階堂は緩やかに首を横に振って、真っすぐな目で僕を貫いた。

「聞いてるんだよ、笹岡に。」

一体僕に何を聞くことがある。人に何かを聞くとき、僅かでも糧を求めるものだ。自分の道が見えているお前に、僕の何が糧になる。

地表人は頭を抱えて俯く。

表 就職か。やろうとしたよ、現に今だって少しはしてる。

底 真っすぐ向き合えば何かは返ってくるはずだろう？君の全部を向ければ、悩むことはない。僕はもう決まったよ。

表 君が？僕と同じはずだろう

底 ああ、僕も不思議だ。僕はなんの迷いもなく活動できたよ。だって他に向かうところなんて無いだろう？

一社だけ面接を受けた。製菓会社だったが、大学生生活で得たことを聞かれて映画作りのことを話した。きつと志望理由より長かった。それだけが理由では無いだろうがするりと落ちて、僕は次の会社の面接で、言葉が脳で渦巻いて渦巻いて出てこなくなった。脚本を書くときは機嫌よく出てきてくれるのに。――ああ、そういうえば僕の撮った映画は、言葉をよく褒めてもらえた。突拍子も無い台詞が多いが、心象をよく表していると――二階堂も、台詞が好きだとよく言ってくれた。その度に人間を認めてもらえたような朗らかな心地が沸き上がってきた。でも、面接じゃ使い物にならなくなった。すべてを否定されたら、僕の間人は何処へ行ってしまうのか不安になってしまったからだ。

地底人は立ち上がり、階段を上り始める。地表人も慌てて後を追う。階段を上がりきると、閑静な住宅街。日光が強く、地底人は日傘を差す。

表 傘を差すのか？

底 ああ、男だからとか悩んでられないよな。君も苦手だろう？
表 暑いのが苦手なのは、同じだ。

話しながら歩くと、家並みが途切れて景色が開ける。低い建物と緑で出来た街は地平線を描いている。立ち止まった地底人は柵にもたれ掛かる。

二階堂の映画の高台だった。街の中に世界を広げる、良い高台。僕は地平から目を離して折り畳みの日傘をぐるりと回しながら、道路の向こう側で三脚を調整している二階堂を見つめた。遠くにある背景と近くにいる人物を鮮やかに撮りたいときは、距離を取りズムをしてピントを合わせるのが効果的だ。| 今二階堂がピントを合わせた僕の表情は不機嫌に違いない。画面からふと顔を上げた二階堂が太陽に気付いていないかのような涼やかさで笑った。良い場所だろう、とでも言いたげな顔に僕は唇に少し力を込めることで返事をした。

底 不安なら、思うように生きてみればいい。

表 それをやる自信もないから不安が終わらない。僕は弱いよ。

底 じゃあ生きるため、金を稼ぐための活動をしろ。手っ取り早いじゃないか。

表 : そうすると、本当にやらなくていいのかと追いかけてくる奴がいるんだ。| でも、無視して活動に向き合えばいいのか。所詮僕の言葉に意味なんて無い。ああそうだ|

底 ああ、そうだ。

地底人の台詞が終わり、僕は緩慢に日傘を閉じた。途端に太陽が輝き始めて、日光が頭を殴る。じわじわ揺れる脳で、二階堂が僕は何を知っているのか考えた。四年目の付き合いだが、僕は二階堂より二階堂の映画の方がよく二階堂という人間を伝えてくれるような心もちがする。二階堂もそうなのだろうか|。三脚を畳んだ二階堂が大股でこちら側に来て、僕の顔の近くにカメラを構えた。レンズ越しに見られているのに耐えられなくなって、僕は俯いた。

地底人は柵にもたれてしゃがみ込む。

表 それにしても君はいいな。悩むことなく就職が決まったのか。

底 ここに入りたいとか、ここは嫌だとかそういう悩みはあつたけど、君のような根本的なものは無かったな。今日は内定式だ。

表 ああ、だからスーツなのか。なんでこうも違うのかな。ほら、たとえば僕らは映画を作ってきただろう。それなんかは

何の壁にはならなかったのか。

底 いや、僕は映画なんて撮ったことはない。

表 | え？映画サークルには入ったけど監督をやったことがないってこと？

底 いや、入学して悩みに悩んだ。映画サークルに入るか、掛け持ちでバイトをこなして将来に備えるか。どう考えたって悩むだろ？やるからには本気でやりたかったけど、本気になれなかった。僕は映画を選ばなかった。

表 悩む必要なんて無いじゃないか。

底 なぜ？僕は何かを作り上げたことがない。点数とか結果とかは作ってきたけど、僕は心から何かを生み出したことがない。生み出す前に悩んで、埋めてきた。

「カット」と二階堂の声が遠くに聞こえたが、僕は傘を閉じる事が出来なかった。地底人の台詞を反芻する。「生み出す前に悩んで埋めてきた」。僕はたとえば、小学校で詩を書くように言われたとき、それから初めて脚本を書いたときも、言葉を綴ることに悩むことはなかった。どんな言葉を使うのかは脳が涙を流すほど悩んだけど、それを埋めることは無かった。

「なんで埋めるんだ」俯いたまま出た声は想像以上に頼りなかった。「お前には分からないんだよ。ぶつかる壁が違うんだ。」

二階堂の声は少しぶつかってきたが、どこか生ぬるくて優しかった。

表 映画を作ったことがないのか。

底 ああ、ない。

表 僕を見てもらいたいと思わないのか？

底 別の方法で見てもらえばいい。すぐに結果が見えるものなんてどこにもある。僕の中から絞り出すなんて、僕には出来なかった。きつと、すごく苦しくて恥ずかしくて辛いんだろう。

表 ああ、そうだ。でもなんでも同じだろう、そんなのは。その分喜びで返ってくることもある。

底 そうだ。なんでも同じだ。僕は別の道で僕を見てもらうことを選んだ。君は作ることを選んだ。それだけだ。だから：

地底人は日傘を閉じる。傾き始めた太陽が影を伸ばす。二人は向き合って立つ。

底 だから、君が不安を投げ捨てたいなら、きつと別の道を選ぶしかない。僕らは多分不器用な人間だ。同時に二つを選ぶなんて出来ないんだ。

表 僕は作ることで人間を認めてもらってきた。

底 僕は、点数と結果だ。

表 だから君は今道を決めていて、僕は今こうして悩んでいるのか？

「だからお前は、悩んでるんだよ。」二階堂がカメラ越しに言った。「俺はお前の書く台詞が好きだ。物語がそのまま作者を映してるわけじゃないってことはよく知ってるけど、お前の脚本はお前そのままみたいだった。ちよつと陰気で―その分明的い方に向かおうとしてる。良い言葉を書くようになって思ってた。俺は笹岡自身より、笹岡の台詞で人間を知れたような気がするんだ。」

同じだ。二階堂の映画で二階堂の人間を知ったような気がした僕と。

「だから、多分人以上に言葉を否定されるのが恐いんだろう。」

「―ああ、そうだ：」

「なんとなく分かるよ。俺も、撮った映像を否定されるのが一番怖くて、逃げたくなる。でも、映像で戦えるところならそれでも良いと思える。」

「：でも、僕には才能がない。」

「才能があるかないかとか、強い意志があるかとかじゃない。そこしか無いんだ、きつと。俺達みたいな奴が心から生きていくにはさ。そこで戦って、駄目だったら、その時の俺達がまた悩むんだよ。」

地底人、再び日傘を差して歩き始める。地表人もふらりとついでいく。

底 僕の生き方と君の生き方、混ぜることはできない。混ぜようとしたから君は破裂しそうになった。

表 君は、作ることを選ばなかった僕なのか。

振り返った地底人の顔に日が射す。

底 そうみたいだ。少し君を羨ましいと思ってるから、確かだ。

：さ、どうやって人間を示していく？

表 ―僕は埋められないよ。作ることをさ。君のことを少しは羨ましいと思うけど、こうやって生きてきたんだから仕方がないのかもしれない。

僕は、レンズ越しに二階堂に断言した。もう、二階堂が提示した以上の台詞を所々混ぜてしまっていた。しかし自分の映画では台詞よりも映像で語ろうとする二階堂は、ここでカメラ視線は変だと子

供みたいに顔をしかめるだろうか。でも二階堂が沈んでいた僕の思考を水面まで連れてきたのだから、カメラに言わないと意味が無いだろう。睨みつけると、カメラの下から覗く口元がおかしそうに変な形に歪んだので、僕は笑ってしまった。

底 ああ、そうだ。君は言葉を作り続けたいとならないんだ：でも方向転換しようと思えばきっと出来る。人間って自由な時もある、たまに。：こういう思考は同じだろう？

表 そうだな、同じだ。

地底人は伸びをひとつ、階段の方へ歩き出す。

底 ：さ、わざわざ階段をめくり上げて僕を引っ張りだした用件は終わりか？もう交代は必要ないだろう。

表 ありがとう。君と話して僕は、僕が言葉を作るこの意味を認識できた。僕の人間を示す方法がそれだったんだ。それしか無いんだ。

底 詩的な僕でなくて悪かったな。僕もお前と話して生き方に自信が持てた。君の分も、経済を回すよ。

表 ：ああ、それは僕にはきつと遠い未来か：一生来ないかもしれないな。

階段にたどり着く。めくれた段に地底人が足を踏み入れる。

底 仕方がない。今の君にはそれしか無いんだから。言葉を生み出して、作って、示していかなければならない。仕方のないことなんだ！。

地底人は姿を消す。地表人は階段にめくれた跡が残っていないことを確認して、夕焼けの中階段を駆け上がり、再び高台へ。暮れていく街の景色を見る横顔は涼やか。

僕は涼しい心もちで二階堂を見た。しかし入念に映像をチェックしているときの二階堂は、僕を気にも留めない。二階堂は、二階堂の映画の高台のような人間だと僕はふと思った。とってつけたようだが、僕にとってそうなのだから良いだろう。何でもない風に突然世界を広げる、素朴な高台。

「学生生活最後の映画が、僕の人生相談みたいになっただけ良いのか」そう投げかけると、真っすぐな微笑が返ってきて、僕も真っすぐぐにそれを受け止めた。

「いいよ。俺はお前の書く言葉が好きだったから：止めてほしくなくて、悩んでるお前につけ込んだ。俺のエゴだ。おかげで良い映像が撮れた。でもお前、最後らへんカメラ目線多くて良くないよ：まあ地底人と地表人が同時に映るシーンは無いし、相手目線でこといいか：」

「撮りなおすか？」

「いや、お前良い目してるよ。視界に残る感じ。：多分悩みの過程がそのまま出てるんだ。―演技はこうして目に残るけど―お前の書いた台詞は脳にすごい残ってるよ。大事にしたら、それ。」

「ああ、今の僕は脚本を書いて：映画を作るしかない：でも、そんな方法があるって、凄いいことなんじゃないか。」

二階堂は、さらりと笑った。二階堂はいつこのことに気付いたんだろう。分からないが、気づいていたからきつと彼の笑顔は真っすぐだった。高台を下る僕らに、夕日が一筋射していた。